

# トマスにおける実在<sup>1)</sup>と言葉

——言語の分析より ESSE の意味へ——

長 倉 久 子

実在を如何に理解するかは、いや、むしろその理解を表明するために、如何なる哲学的方途を有しているかは、神学的思索の方向を決定する。トマスの形而上学が esse (actus essendi) をその実在理解の中心に据え、esse と essentia の実在的区別を基にその神学が展開されていることは周知の事柄であるが、esse, actus essendi, esse と essentia の区別といった考えは、ボナヴェントゥラの形而上学・神学においてもまた有効に機能している。しかしながら、これらの言葉に込められている意味が両者において微妙に異なっていることを見落としてはならない。本稿においては、トマスがこれらに込めている意味を、被造物における esse と essentia の実在的区別といういわば結論的定式をどのように導きだしているかを考察することによって、多少なりとも明らかにしてみたい<sup>2)</sup>。

ところで、トマスの esse は“有無の彼方”にある。結論を先取りして言えばそれは言語以前のもの、言語を超え言語化を拒否するものである。しかし、それにもかかわらず、人間の語る言語が虚しいものではなく何らかの仕方では実在を表現するものであるならば、換言すれば、人間にとって本質的なものである言語が実在の理解に当たって何らかの意味を持つとすれば、実在の根源的、究極的側面たる esse は何らかの仕方では言語に表現されなければならない。かくて、実在の形而上学的考察を試みるにあたって、アリストテレスに倣って〈我々にとってより先なるもの〉から出発するトマスは、同じくアリストテレスに従って日常言語を手掛りとする。日常言語がどのように機能しているか、これこそトマスにとって考察の出発点であり、依拠するところであり、最終的判断の基準である。

## I. EST に向かって

### I-1 日常言語の分析

我々は多くのテキストの中からトマスが彼独自の *esse* (*est*) の意味を組織立てて明瞭に表現している『命題論註解』を取り上げ、ここでトマスがアリストテレスに従って、概念ではなくあくまでも日常話されることば (*dictio*) の機能の分析に終始しつつ、アリストテレスを超えて *actus essendi* を表示するものとしての *esse* の意味を浮彫にする過程を見よう。

**I-1-1 動詞一般の機能** トマスがこのアリストテレスのテキスト(『命題論』第三章)の註解において目指すところは、動詞 *est* が日常の言葉として如何に機能しているかを明らかにすることである。この目的を達するための準備段階として、彼は先ず動詞一般の機能の特徴を挙げる。

動詞の機能の第一は、能動的ないし受動的はたらき・動作を表示することである。この点で、何らかの物・事 (*res*) をそれ自体として存在するものとして (*quasi per se existens*) 表示することを固有の機能とする名称とは区別される。しかしながら、働きの表示即動詞の機能と考えることはできない。トマスはこの点に注意して、はたらきの表示に三つの可能性を挙げている。(1)働きの或る種の事 (*res*) として捉え、それをそれ自体として独立に抽象的に (*per se in abstracto, velut quaedam res*)、名詞形(例えば能動, 受動, 歩行など)で、表示することが出来る。(2)働きの独立に切り離して捉えず、実体から生じ、実体を基体としてそれに内属するもの (*actio egrediens a substantia et inhaerens ei ut subiecto*) として、動詞形で術語として表示することが出来る。(3)実体から生じ実体に内属するというはたらきの側面 (*inhaerentia actionis*) が知性によって把握され、或種の事として動詞の不定法(例えば、働きかけること、働きを受けること、歩くこと)で表示される。従って、不定法は、働きの基体への内属を表示するものとして、具体性をもつという点で動詞と考えられ、或る種の物事を表示するという点で名称と考えられうる(*n*<sup>o</sup>56)<sup>3)</sup>。

はたらきの表示に付随して、時の表示が動詞の機能の特徴として挙げられるが、しかし、時を或る事 (res) として主たる表示内容とするのは名称である (筆者：現在・過去・未来、きのう等) (n°58)。しかも、動詞の時制は本来的には現在に限られる。なぜなら、働きかける或いは働きを受けるというのは端的に言えば現にこの時の現実 (agere vel pati IN ACTU) であり、動詞はこれを表示するのがその本来の機能であるから (n°63)。従って、直接法現在時制の動詞以外は、非本来的なもの (secundum quid) として (n°63) 動詞の変形 (casus verbi) である (nn°64-65)。

最後に、動詞は述語として用いられるのが本来であることから、主語との複合を含意している (n°59)<sup>4)</sup>。

要するに、動詞の特徴は、基体 (主語) に内属する働きの現にこの時の現実を述語として表示することにある、と言えよう。

I-1-2 ipsum verbum quod est esse: ens の分析より esse へ 動詞は述語として用いられた時、その本来の機能を発揮する。他方、動詞が単独で用いられた場合、それは何か或る事柄を表示するものとして名詞と同じく名称である (nn°66-67)。名称は何か (aliquid) を、つまりもの・こと (res) を表示する。この限りで、名称は単独で何らかの意味を有し、これを聞く者はその意味を了解し、思考の運動はそこで静止する、とアリストテレスは言う。然し、ここでトマスはアリストテレスを越える布石として、アリストテレスを訂正する (Sed hoc videtur esse falsum)。名詞であれ動詞であれ、名称として単独に用いられたならば、それらは聞き手の心を最終的に満足させず、思考をそこで停止させることにはならない。例えば、ただ「人」と言えば、人が「どうした」(quid de eo) を聞き手は期待し、ただ「走る」と言えば、「何が・誰が」走るのか (de quo) を聞き手は知りたいと欲するからである。従って、人間知性 (話し手・聞き手) の思考運動を静めるのは、完結した文のみである (n°68)<sup>5)</sup>。

トマスがアリストテレスを訂正する意図は、述語としての動詞の機能、つまり完結した文における動詞の機能の中から動詞 ESSE の意味を探ることで

ある。彼は、「アリストテレスが直ちに付け加えて『しかし、(動詞単独では) あるか或いはあらぬかは、未だ表示しない』と言っている」<sup>6)</sup> この言葉を註解して言う。「即ち、未だ何かを結合と分離という仕方で、或は真偽という仕方で、表示しないのである」。真偽を表示するのは単語ではなく、主語と述語が結合している或いは分離している文である。しかも、希求文や命令文ではなく、言明を表す命題文である。この真偽の表示に最もよく係わっているのが動詞 ESSE とその否定型 NON ESSE であることに彼は注目する<sup>7)</sup>。そして、実は、「ある」というこの動詞 (*ipsum verbum quod est esse*) の意味するところが全ての動詞の中に含意されている (例えば、*currere=currentem esse*) ことは、アリストテレスが指摘している通りである。

ところで、*esse* も *non esse* も単独では、実在の真偽を表示することができないことは、他の全ての動詞と同様である<sup>8)</sup>。「なぜなら、如何なる動詞も、『物事のあること或いはあらぬこと』、すなわち、物事が“ある”或いは“あらぬ”ということを表示することができないからである」(n°69)。我々は、トマスがここで『物事のあること或いはあらぬこと』(*rei esse vel non esse*) という名詞の所有格と不定法で表わされたアリストテレスの言葉を言い換えて、わざわざ物事が“ある”或いは“あらぬ”(*res SIT vel NON SIT*) と動詞を強調していることに注目しなければならない。

ところで動詞はすべてその現在のはたらきを表示するという特徴からして、分詞+*esse* で言い換えられるという意味で (*currere est currentem esse*), *esse* を含意していると言えるのであるが、しかし、「如何なる動詞も“この全体”(hoc totum) すなわちくもの・ことが、ある或いはあらぬ」(*rem esse vel non esse*) を表示することはない」(n°69)。

トマスは、アリストテレスが以上の言葉を如何に理解しているかを明らかにするために、後者が続いて『*ens* もまた単独では何ものでもない』と言っていることに我々の注意を喚起する (n°70)<sup>9)</sup>。ここでトマスはアリストテレスの EST 理解の限界を明らかにし、よってもって彼独自の *esse* の新たな理解を提示しようとするのである。トマスは細心の注意を払い、アリストテ

レスの言葉を確認する。「アリストテレスは『動詞は〈物事がある或いはあらぬ〉を意味しない。しかし〈あるもの〉さえもまた〈物事がある或いはあらぬ〉を表示することはない』と言ったのだった」。そして、物事がある或いはあらぬを表示しない、ということこそ、単独にそれだけで口にされた ENS は何ものでもないと言った意味であると註解し、更にその意味を明確にするために「つまり何か(で)あるを表示しない」と付け加えている(n°71)<sup>10)</sup>。

アリストテレスが〈何ものでもない〉と言い切ったところから、トマスは大きな一歩を踏み出す。彼は〈あるもの〉(ENS)という言葉は〈ある・ところのもの〉(quod est)という二語に置き換えることによって、アリストテレスが読みとることのできなかつた EST のもつ深い意味を明るみに出そうと努めるのである。

「実にこのことは私が ENS と呼ぶこのこと (hoc quod DICO ens) について最もよく見られたのであった。なんとなれば ENS は〈ある・ところのもの〉に他ならないからである。従って ENS は、二つを、つまり私が〈ところのもの〉と言うこのことによって〈何かのもの〉(res)を、また私が〈ある〉と言うこのことによって〈あること〉を表示すると思われる。そして、もし仮りにこの ENS と言われ語られる言葉 (haec DICTIO ens) が何よりも先ず〈あること〉を表示するとしたら、疑いもなく〈何かがある〉を表示するであろう」(n°71)。

アリストテレスにとって ENS は〈何かが(で)ある〉を表示しないがゆえに何ものでもなかった。彼にとって、〈ある〉は〈何か〉にいわば埋没し (ALQUID=ESSE)、何ものでもない (nihil est) として特別な注意は払われていなかった。しかるに、トマスは、QUOD EST と二語に分節して語る (dico) 行為において、人が「ある」“est”と言うこのことによって何が意味されるか (per hoc quod dico “EST”) を明らかにしようとする。ここではもはや ALQUID=ESSE としてではなく、ALQUID/ESSE として、ESSE そのものが純粋な形で前面に現われてくるのである。

続いてトマスは『しかし (あるものは) 何か或る結合を合わせ意味しはする。云々』を註解して言う。「しかし、〈あるもの〉という言葉は、私が〈ある〉と言うこのことのうちに含意されている結合をば主たるものとして表示することはなく、むしろ、〈あること・をもつ・もの〉(res habens esse) を意味する限りでそれを合わせ表示するのである」(n°71)。人が〈ある〉と言う時、〈何か(で)〉ということが、つまり〈ある〉と〈何か〉との結合が、常に含意されている。動詞の述語としての機能からそれは当然である (cf. p. 23)。〈あるもの〉と言う時にもまた〈ある〉と〈もの〉の結合が含意されている。しかし、この結合は、単純に把握されたもの (simplex conceptio aliquidus, n°68) であり、「従って、結合のかかる随伴的表示は真偽ということには十分ではない。なんとなれば、真偽が成り立つ結合は、結合の両端を結び合わせることによってしか知解されえないからである」(n°71)。

動詞 ESSE の意味が明らかになるのは、結合・分離の中のみ、つまり主語・述語の結び合わされたあるいは分離された文の中のみである。すなわち、動詞 EST としてしか、その本来の意味を露わにしないのである。

I-1-3 hoc verbum EST かくてトマスは更に進んで、他の翻訳にアリストテレスの *τὸ ἔν* が ens ではなく esse とあるのに注目し<sup>11)</sup>、動詞 EST に正面から迫ろうとして言う (n°72)。「すなわち、如何なる動詞も物事がある或いはあらぬを意味することはない、ということ、アリストテレスはこの EST という動詞によって証明したのである。EST はただそれだけで言われた時、あること (esse) は表示するとはいえ、何かがあることは表示しない」(n°72)。ENS は (現にある、ということから付けられた名称であるが)<sup>12)</sup> esse の表示を主とするものではない<sup>13)</sup>。それは名称として〈もの〉(RES habens esse) を表示するものである。他方〈動詞〉EST は何か (aliquid) ・もの (res) を表示するのではない。ここでは完全に〈何〉(quid) から区別された esse が取り出されている。

たしかに EST という言葉は、主語となる何かと EST とともに述語となる何かとを含意している。しかし、それだからといって、EST という動詞

の主たる機能は〈何か〉と〈ある〉の複合を表示することにあるのではなく、むしろ、主語と述語を〈繋ぐこと〉にある。そしてこの結合は両端に置かれた何かを表示する言葉によってはじめて理解されるのであり、繋ぎの言葉自身は何かを表示しないという意味で無内容である。

しかしこの無内容な言葉が実は重大な意味をもっている。

この重大な意味を取り出すために、トマスはアリストテレスが『しかし、(この動詞 EST は) 結合を合わせ意味しはする (ΠΡΟΣσημαίνει, CONsignificat)』と付言していることを解説して、「なぜなら、その表示は主たるものではなく結果的なものであるから」と言い、続けて「すなわち、まず何よりも第一に表示するのは、端的に現実性という仕方で知性に入ってくるそのことである」と断言して、EST が知性によって現実性として捉えられること以外には何も (ABSOLUTE) 意味しないことを明確にする。更に「なぜなら EST は、ただそれだけで言われたならば、現にある (IN ACTU ESSE) を表示するのであるから」と言い換えて、それ故にこそ動詞として表示するのであると付け加えている (cf. p. 23; n°73)<sup>14)</sup>。

「ところで、この動詞 EST が何にも増して表示する現実性は、実体的現実態であれ附帯的現実態であれ凡ゆる形相に共通して現実性である」(Ibid.)。ここで我々は〈凡ゆる形相に共通して〉という表現を誤解してはならない。トマスは、この動詞 EST と言っているのであり、〈凡ゆる類に共通する ESSE)<sup>15)</sup> や〈共通する ESSE〉(ESSE 一般)<sup>16)</sup> や〈共通する ENS〉(ENS 一般)<sup>17)</sup> という概念としての〈あること〉についてではなく、あくまでも語られる行為において現れる EST について述べているのである。「従って、我々がどの形相であれはたらきであれ、それが何か或る基体のうちに現実にあることを表示しようと欲する時、我々はこの動詞 EST を用いてそれを表示するのである」(Ibid.)。

ところで現実とは〈この全体〉すなわち〈ものが(で)ある〉である (cf. p. 24)。それは、〈もの〉という言葉のみでも〈ある〉という言葉のみでも表示されえない。〈ある〉が現実性を表示し、主語(と述語)を暗示することに

よって res を含意するとはいえず、この全体としての現実<sup>レ</sup>は、共に置かれた (cum-ponere) EST の両端の言葉なしには完全<sup>レ</sup>に理解<sup>レ</sup>されることはできない。つまり、主語が EST によって述語と結ばれて、はじめて真偽が問題となる現実<sup>レ</sup>を表示<sup>レ</sup>することば (命題文) となるのである (cf. p. 24)。「従って、結果としてこの動詞 EST は結合 (compositio) を表示<sup>レ</sup>する」(Ibid. fin.).

## I-2 esse と essentia の実在的区別

I-2-1 日常言語からメタ言語へ 以上トマスは日常言語の分析を通して、人間が語る行為 (dictio, dico) において EST という動詞がいかなる意味をもち、いかなる機能を果しているかを明らかにしたのであるが、トマスはこれを出発点として、ここからメタ言語のレベルに移行して実在の分析を行っている。

先にトマスは「如何なる動詞も〈この全体〉すなわち〈事物があること或いはあらぬこと〉を表示することはない」と言ったのであるが、verbum はここで〈ことば〉と訳し換えることもできよう。動詞はただそれだけで言われたならば、名称にすぎない。そして名称が表示するのは〈もの・こと〉である。従って、名称 (動詞も含む) がただそれだけで言われたならば res つまり aliquid は表示されても、それが〈現(実)にあるかあらぬか〉は表示しない。他方、動詞 EST は〈現(実)にある〉を表示するが、res ないし quid は表示しない。それゆえ EST は単独では無内容である。従って、res を表示する名称に動詞 EST が添えられることによって、名称が表示する内容が現実のものとして表示されることになる。しかし、それによって内容が変わるわけではない。かくしてトマスは何か・ものとして表示される実在の内容を総称的に essentia と呼び、全ての何<sup>レ</sup>について、それが現(実)にある<sup>レ</sup>という事態を総称して不定法で esse と呼んで言う。「essentia と呼ばれるのは、その actus (現実態・はたらき) が esse であるものである」<sup>18)</sup>。そしてトマスはこの esse と (ens と) essentia の間の関係を、日常言語の熱する・熱するもの・熱の三語の間の関係によって説明して言う。「すなわち、esse は

〈あるところのもの〉としての何かのはたらきである。例えば熱することが熱するもののはたらきであるように、そしてまた〈それによってあるところのもの〉、つまりそれによって esse に名称が付されるところのもののはたらきである。例えば熱することが熱のはたらきであるように<sup>19)</sup>。

ここで *essentia* は奪格の *quo* で示されている。この奪格の用法は、状態・はたらきの起源、型、仕方等を表示する<sup>20)</sup>。つまり、Xスル (Xサレル) というのはたらきに対してそのはたらきを特徴づけるもの (型) が考えられ、それを表示するための抽象名詞が付される (*calor, igneitas, humanitas*)。あるいは具体的に実体として名称が付される (*calefaciens, ignis, homo*)。実際の言語の生成上の順序はそれぞれの語によってまちまちであろうが、〈Xスル—Xスルモノ—X〉においてXにあたるもの (意義素あるいは、その名詞化されたもの) が表示するものが *essentia* である。そして *esse* はXスルのスルが表示している。しかし、*essentia* がスルを含まないのに対し、*esse* は当然Xを含んでいる。

**I-2-2 ESSE/ESSENTIA** 現実 (*actus*) は全てはたらき (*actus*) である。そして、この現実は様々なはたらき方をしている。この様々なはたらき〈方〉 (*modus*) がはたらきに〈何〉を表示する様々な名称を与えるのであり、はたらきの現実そのものは (*simpliciter, absolute*)、はたらき〈方〉が異なるにせよ、すべて一様に〈現(実)にある〉としか表現されえない。かくてトマスは「実在には二つの原理(次元)がある。すなわち事物の何性とその *esse* とである」<sup>21)</sup> と言う。日常の言語活動に於て人が実在 (*hoc totum*) について述べる言葉に二つの種類のもものが区別された。それは事物 (もの・こと) を表示する名称 (動詞も含む) と動詞 *EST* であった。そして言葉の区別は、他ならぬ実在における二つの原理の区別に根差していると理解されてくるのである。「すなわち、如何なるものであれ、本質とその *esse* とが別であるものにおいては、それによってあるもの (〈ある〉の原理) とそれによって何かであるもの (〈何か〉の原理) とは別でなければならない。なんとなれば、如何なるものについても、その *esse* によって「……ある」と言われ、他

方如何なるものについてもその本質によって「何」と言われるのであるから」<sup>22)</sup>。

**I-2-3 ESSE/ESSENTIA, ACTUS/POTENTIA** この *esse* と本質との原理的相違をトマスは現実態と可能態の相違 (関係 *comparetur ad ...sicut...ad ...*) として捉え、再び言語の機能に訴えて説明する。「あることは凡ゆる形相ないし本性の現実性である。すなわち、善性や人間性が現実であることが表示されるのは、ただ我々が〈それが(で)ある〉ことを表示する場合のみであるから。それゆえ、*esse* それ自身は *esse* とは別の *essentia* に対して現実態の可能態に対する関係として考えられる」<sup>23)</sup>。

*De Potentia* の一節は更に明瞭である。「いかなる個的形相も、*esse* が措かれなければ、現実のものとして知解されない。例えば人間性や火性は、質料の可能性のうち知性の外に存在するものとも、作用者のちからのうちにあるものとも、更にまた知性のうちに存在するものとも見做されうる。しかし *esse* を有するこれは現実に存在するもの (*actu existens*) となっている」<sup>24)</sup>。

ここで、*esse* は *essentia* を実在的に現実化すると考えられてはならない。これはあくまでも言語上のこと (表示)、人間知性の知解の上でのことである。

**I-2-4 ESSE の逆説** トマスは彼の言う *esse* (*hoc quod DICO esse*) が誤解されぬよう細心の注意を払う<sup>25)</sup>。「私が言う *esse* に何かそれよりも更に形相的なものが加えられ、*esse* を現実態が可能態を規定するように規定すると解されてはならない。すなわち、かかる *esse* はその定義からして、規定すべく加えられるものとは別である」。トマスがここで言う *esse* は、それに *essentia* が加わることによって内容が生じるものの如くに考えられてはならない。それはむしろ全てである。それゆえ「*esse* に外からは何ものも付け加えることはできない。なぜなら、*esse* に対して外なるものは、ただあらゆるもののみであり、それは形相であることも質料であることもできないからである。」従って、ここでは逆説的な表現しかできない。「*esse* が別の原理

によって規定されるのは、可能態が現実態によって、という仕方ではなく、むしろ現実態が可能態によってという仕方である」<sup>26)</sup>。

しかしまた、esse が essentia とは別であるということから、esse が accidens のように付け加わるものであるという誤解をも斥ける。esse はいわば essentia の構成要素によって構造を与えられているのである (QUASI constituitur per principia essentiae)。従って、esse から付けられた名称 ens は、esse の内部構造たる essentia から付けられた名称 (例えば homo) と同一の事柄 (内容) を表示するのである<sup>27)</sup>。

要するに、トマスの言う esse は essentia を実在的に現実〈化〉するものではない。それは essentia の現実〈態〉である。

### I-3 ESSE の超越性

以上、トマスが日常言語の分析をもとに、メタ言語 (esse, essentia, actus, potentia) によって実在における esse と essentia の区別を明らかにする過程を見たのであるが、ここで果して esse を〈あること〉と訳してよいかの問題となろう。つまりこの不定法の用法が名詞的であるか動詞的であるかの問題である。前者であればそれは名称である。後者であればそれは actio を表す。前者であれば、それは何らかの res を表す概念である。また動詞であっても、動詞一般には、res (如何なる actio 或いは passio か) の表示が含まれていた (cf. p. 25)。しかし、動詞本来の機能は、その res の現にこの時の現実 (agere vel pati IN ACTU) を示すことにあった (p. 23)。その意味で全ての動詞は esse を含んでいた。ところが、動詞 EST には res の表示は含まれていなかったのである (cf. p. 26)。従って、トマスが esse と呼ぶ (hoc quod DICO esse) のは、呼び名 (ことば) ではあっても、「esse という概念」「esse の概念」は存在しないのである。これは actus essendi というメタ言語によってトマスが意味するものについても同様である。トマスは概念化できない現実そのものを指して actus essendi と呼んでいるのである。つまり、ものが〈現に〉ある時に actus であると言われるのであり<sup>28)</sup>、

actus とは何かと尋ねられても、それを定義することはできず、ただ具体的な例によって理解する以外に途はないのである<sup>29)</sup>。しかも、それは potentia との関係・比較によって可能となるのである<sup>30)</sup>。

esse ないし actus essendi という「ことば」によって指示されるものは概念を超越する。ではかかるものは知性によっては捉えられず、ましてやその表現は不可能なのだろうか。また、トマスが言う esse と essentia の実在における区別とは一体なになのだろうか。これらを明らかにするためには、再び言語の分析に戻らねばならない。

## II 述語行為と ESSE

### II-1 再び日常言語へ

言葉は本来本質を表示するもの、つまり概念である。従って esse という言葉にする時、esse は概念化し、本質化する。これは人間が言葉を用いて実在を説明しようとする時、避けえぬ宿命である。この不可避の宿命の中にあつてトマスはこれを突破しようとする。ここで彼が依り拠とするのは、再び日常言語である。トマスはここでもまたアリストテレスの言語分析を手がかりとする。

II-1-1 Quot modis dicitur ens 『形而上学』第五卷七章で、アリストテレスは、〈ある(もの)〉(ὄν)と言われる仕方を区分してるが、ここでは彼は、先ず(1)附帯的に「ある」と言われる場合と(2)自体的に「ある」と言われる場合とに区分し、更に(3)「ある」と言うことは「真である」の表明であることを明らかにし、そして最後に(4)「ある」を可能的に言われる場合と完全現実態において言われる場合とに分類している。トマスは、『形而上学註解』第五卷第九講でこの(1)から(3)の「ある」といわれる仕方を取り上げ註解しているが<sup>31)</sup>、この註解こそ、トマスの言う esse の意味を明らかにしてくれよう。

トマスはアリストテレスの区分について、(1)は、「云々が云々である」(例えば homo est albus) のうち、先ず〈ある〉の意味をこの文全体の表示する

事柄のレベルで捉え、この事柄が言われるのが附带的である場合であり、(2)は、文全体から、切り離して独立に (per se) 考察する場合であると理解し、(3)の意味での「ある」[(4)についても同様]を(2)の中に組み入れている<sup>32)</sup>。

アリストテレスは先ず (1)〈ある〉が文全体の中で考えられ ( $\dot{S} \text{ est } \dot{P}$ )、それが附带的であると言われる場合を分析しているが、これを注釈してトマスは、かかる〈附带的ある〉を表示する文に於いては、この動詞 est は関係 (comparatio) を表示するものであり<sup>33)</sup>、云々が云々に“述語付けられる”のが附带的であることを意味していると言う<sup>34)</sup>。つまり、〈あること〉が表示するのは〈附帯すること〉に他ならないのである<sup>35)</sup>。そして、〈ある〉という言葉が用いられるのは、それについて述べられている当のもの (基体: 主語・述語のどちらか一方が表示するものか、あるいは言葉に表示されていない隠されたもの) が〈あるもの〉(ens)であり、それについて述べている言葉 (主語・述語の両方か或いはどちらか一方) の表示するものが、その基体の〈うちにある〉(inest enti, insunt enti) からである<sup>36)</sup>。

II-1-2 quot modis praedicatio fit, tot modis ens dicitur. 続いてアリストテレスは自体的に言われる  $\dot{m}$  を取り上げるが、それは〈云々は云々である〉という文全体から切り離し独立するものとして (ens per se) 捉えるのである。ところで、(2-1)〈云々は (が) ある・云々である〉( $\dot{S} \text{ est } \dot{P}$ .  $\dot{S} \text{ est } \dot{P}$ ) と捉える場合と、(2-2)〈ある〉( $\dot{S} \text{ est } \dot{P}$ ) と捉える場合では、〈ある〉の意味が異なってくる。(2-1)の場合、〈ある〉は云々に埋没し、もろもろの述語が表示する〈内容があること〉を意味している。すなわち、実在は様々なあり方をしており、この様々なあり方を我々は様々なに叙述する<sup>37)</sup>。かくてアリストテレスは様々な述語の表示する“内容”に応じて〈あるもの〉を分類し、十の範疇 (praedicamenta) に整理したのだった<sup>38)</sup>。それ故、この意味での〈ある〉は、叙述に用いられる言葉の諸形態 (figuras praedicationis) の表示するものと同じことを表示する<sup>39)</sup>。例えば、「人間は動物である」と言えば、その〈ある〉は、実体を意味する。(つまり、人間は実体として言えば動物である。) また、「人は色白である」と言えば、その〈ある〉は性質を

意味する。(つまり、その人について性質の点で言えば色白である。) est の意味は、述語の側のみによるのではない。基体について叙述する言葉は主語にも現れるのであって、この主語の表示するものによっても est の意味が規定されるのである。(例えば、「ソクラテスは動物である」と言えば、ソクラテスというこの第一実体について言えば、の意味になる<sup>40)</sup>。ところで、何かについて叙述がなされる時、必ずしも常に動詞 est が用いられる訳ではない。なぜなら、述語には est 以外の動詞も用いられるのであるから。しかし、動詞はすべて、その意味からして (cf. p. 24) EST+分詞の形に言い換えられることができる<sup>41)</sup>。従って、何かが述語付けられる仕方の数だけ、それだけ多くの仕方で〈何かがある〉が表示されるのである。ここでトマスは、アリストテレスの注意が〈ある〉にではなく、〈何か〉に集中し、〈ある〉が〈何か〉に埋没していること、彼にとって〈ある〉はあくまでも〈何か(で)ある〉であることに我々の注意を促すため、アリストテレスの言葉を言い換えて『あるものと言われるそれだけの数だけ』、つまり何かが述語付けられる仕方に応じて『あることが表示される』、つまり、それだけ多くの仕方で、何かがあることが表示される」と言うのである<sup>42)</sup>。ここでは、叙述に用いられる言葉(動詞も含めた意味での名称)が、何か或る仕方での〈あるもの〉(ens)であり、その意味で様々な〈何かあるもの〉であることとして捉えられている<sup>43)</sup>。しかし、〈述語づけがなされる〉その仕方の数だけ、というトマスの言葉に我々は注目しなければならない。ここには、「何か」から切り離された「ある」が既に示唆されている。

II-1-3 esse et est significant compositionem propositionis トマスはアリストテレスに従って、次に(2-2)「云々は云々で」から切り離し、独立に「ある」(esse et est)を問題にする。ところで、(2-1)の〈あるもの〉が知性の外にあるもの<sup>44)</sup>を表示するものであり、その本性の様々なものに従って十の範疇(praedicamenta)に分類されたのに対し<sup>45)</sup>、この「ある」(〈あるもの〉)は、ただ知性の中のみある<sup>46)</sup>。すなわち、〈あること〉と〈ある〉という言葉は、知性が結合し分離しつなす命題(propositio)の構成(compo-

sitio) を意味表示するのであり、命題の真なること、そして、その根拠としての事物の真理を意味表示するのである<sup>47)</sup>。

述語行為 (dicimus aliquid esse) は、肯定形であれ否定形であれ、命題の真なることの表明である<sup>48)</sup>。命題は、知性が〔(2-1)の意味での ens, entia を〕結合し分離する操作を通して構成する。そして、entia を結合し命題と為すものが繋ぐ動詞たるこの est という動詞である<sup>49)</sup>。この意味で esse, est は、命題の真偽を表明する機能を担う言葉である。そして命題は知性の産物であることから、〈知性のうちにのみあるあるもの〉(ens, secundum quod est tantum in mente) とトマスは言ったのだった。しかしながら、それが真偽の表明に係わるものとして、単なる知性の産物なのではなく、あくまでも実在に基づいているのである<sup>50)</sup>。

では、実在する事物の modi essendi を表す entia を知性が繋ぎ命題を構成するのは何故だろうか。

## II-2 言語の背後にあるもの

II-2-1 ことば・知性・実在 言語は、人間が知性によって実在を捉え理解したところを表現する手段・記号である<sup>51)</sup>。そして、もし我々の日常の言葉が虚しいものでないならば、ことばと実在の間に、そして実在と知性の間に何らかの対応がなければならない。かくてトマスは、実在における〈もの何たるか〉とその esse との区別を、知性の二つの働きに対応させる。一つはもの何たるかを把握する概念形成作用であり、もう一つは結合・分離することによってもの〈あるという現実〉(esse) を知解する判断作用である<sup>52)</sup>。人間知性が結合することによって (componendo) 肯定するのは、他ならぬ実在の現実そのものが複合的に構成されているからである<sup>53)</sup>。我々の知性は現実に複合されている事物をその認識の起源としているのであるから、結びつけ或いは離すことによってしか、その事物の現実 (illud esse) を捉えることはできない<sup>53a)</sup>。知性が結びつけ或いは離す entia とは、概念を形成する知性の働き (formatio, intellectus formans quidditates) が事物の essentia

を様々な角度 (ratio) から切り離して (absolute), それぞれ何 (quid) として捉えた内容すなわち単純概念 (indivisibilia intelligentia, simplicia concepta) である。そして単純概念を表示する諸々の言葉 (nomen, verbum) を結びつけ、判断を命題とするのが、他ならぬ動詞 esse つまり est (動詞一般の中に潜んでいるものも含め) である<sup>54)</sup>。

**II-2-2 繋ぎの詞 EST** 動詞 EST は繋ぎの詞にすぎない。しかし、この繋辞にトマスが見出す意味こそ、ボナヴェントゥラと彼を分つものである<sup>55)</sup>。

先に、この動詞 EST は、まず何よりも〈知性のうちにただ純粹に現実性という仕方に入ってくるもの〉を表示し、結合をば含意する、しかし、この含意された結合は、両端に言葉を置きそれを結びつけることによってしか理解されることができない、その意味で、結合の表示は結果的 (ex consequenti) である、と言われた。(cf. pp. 27-28) 同じく『命題論註解』において、トマスはアリストテレスの言葉『EST が第三のものとして付け加わって述語される時』を解説する。EST はただそれだけで述語される場合 (例えば Socrates est) と、主たる述語に結ばれてこれを主語に繋ぐ場合 (例えば Socrates est albus) とある。前者の場合、est は「事物の本性のうちにある」(Socrates est in rerum natura) を意味表示するために用いられている、とトマスは言う。(従って、実際には前者の場合も後者の場合も、EST の機能には相違はないと言えよう。なぜなら、慣用的了解を除外して考えれば、Socrates est は、est in mente humana, est in mente divina, est in pictura 等、いかようにも考えられるからである)。さて後者の場合には、EST は主語・述語 (ともに名称) に対して第三の言葉として付け加わっているが (est tertium adiacens), この EST は、述語を主語に連結し、これを媒介として述語 (名称) が表示する事柄 (albus) が主語の表示するもの (Socrates) に属することが示されるのである。従って、述語として置かれた名称と一つになって述部となっている<sup>56)</sup>。換言すれば、〈ある〉〈あらぬ〉という言葉は、ただ単に主語の存在 (existentia) を表示するのみではなく、述語によって表示されているものが主語によって表示されているものの〈うちに現実にある〉(inest) 或いは

〈あらぬ〉ということを表示しているのである<sup>57)</sup>。

では、主語となる名称と述語となる名称を EST を媒介として結びつけるのは、何故なのだろうか。

**II-2-3 componendo et dividendo: 人間知性の性格** 主語・述語として用いられる名称は、実在について単純に把握された概念を表示するが、しかしこれらの名称ないし概念は、ただそれだけでは現実 (*hoc totum: scilicet rem esse vel non esse*, cf. p. 24) を表示しない。知性がこれらの概念を実在に照らし合わせ (*si referatur ad rem*)、これらの概念が指示する実在が実は〈一つ〉であることを何らかの形で捉えた時<sup>58)</sup>、これらの二つの概念を結び合わせる。しかし、これらの概念の指示するものが実在として別であることを捉えた時 (*ut apprehendat res esse diversas*)、それらを分離する。人間知性は概念を結合・分離することによって実在について判断する。この判断は、概念を表示する名称を主語・述語に振り分け、第三の詞 EST あるいは NON EST をもってそれらの名称を結合・分離し、それによって、肯定命題・否定命題という言葉による表現となる<sup>59)</sup>。

かくて肯定命題において、主語・述語として置かれた名称は同一のもの(実在)を指示するが、しかしそれらの表示する内容は異なっている<sup>60)</sup>。では、なぜ同一のもの(実在)を主語・述語という二極によって表示するのだろうか。それは、人間知性が同一の実在を様々な観点から捉えるからである<sup>61)</sup>。人間は事物の本質(とそこに含まれる諸々のもの)を一挙に (*per simplicem intelligentiam*) 捉えることはできず、むしろ様々な観点からそれに迫ろうとする。かくて様々な異なる内容を表示する概念を連ねていくことによって一つの実在を理解していくことになる<sup>62)</sup>。従って、一つの実在についての理解は、それぞれ別々に理解したところのものを、実在と照らし合わせて (*si referatur ad rem*) 結びつけ或いは離すという仕方で一つのものにまとめ言表となすのである<sup>63)</sup>。

**II-2-4 判断と言葉** 人間は言葉を用いて判断を言い表す。言表ないし命題は、様々な観点から捉えられた本質を表示する名称を主語と述語に振り分

け第三の添えられた詞 EST で結んだものであるが、ここで何故 EST が介入するのだろうか。

實在 (ens) を名指し述べる言葉は、本来個として一つであり不可分である豊かな内容をもつ實在を様々の観点に従って切り分け分類する。アリストテレスは、こうした言葉をカテゴリーとして様々の観点から（実体、性質、等々）整理したのだった。ところで實在 (est) を区分し分類する様々な観点は、實在のあり方 (MODUS *essendi*) である。そしてこの観点を表示する諸々の言葉は、互いに壁で仕切られ、相互に浸透不可能であり、また何か一つ言葉（カテゴリー）に解消されることもできない<sup>64</sup>。そして、これらのカテゴリー（名称）は、真偽が問題となる〈現にある〉(in actu esse) を表示することはなかった (cf. p. 24)。つまり、これらの言葉のみでは可能性を表示するにすぎない (solum in potentia) のである<sup>65</sup>。それゆえ知性は異なる観点を表示する言葉の表示するものが“現実に”一つの實在であることを判断する時、言葉（観点）の多元性・二極性 (pluralitas) を超克しようとする。この超克を可能にするものこそ、〈ただ純粹に現実性を表示する言葉〉EST に他ならないのである。従って、本来一つで不可分の個なる實在について判断し、命題の形で叙述する時、述語によって意味表示されるもの (res significata per praedicatum) が主語によって意味表示されるもの〈うちに現実にある〉ことを、人は est という言葉を用いて表示するのである。換言すれば、異なる観点から同じ實在を表示する異なる言葉が est によって繋げられ、一つの命題となることによって一つの現実の實在、modus と esse の不可分の一体 (Hoc totum, cf. p. 24) を表示するのである。

### II-3 結び：述語し断定する行為 (praedicatio) において露わとなる esse

人間知性が現実<sup>1</sup>に立ち帰り、現実<sup>2</sup>に照らし合わせて判断する時、概念を越える現実が意識化され、“事実”の根底<sup>3</sup>にあって事実を支えている言語化・概念化を拒む現（原）実 (actus) が、本質とは次元を異にする現（原）存 (actus essendi) が、述語づけ (praedicatio) という行為 (actus) において露

わとなる。actus essendi が露わとなるのは、書かれた文字における命題・言明 (enuntiatio) ではない。正に〈今現に言う (dico) 行為 (actus)〉(現実活動)においてこそ露わとなるのである。書かれた文字における“est”は、間接的に、つまりこの文字が“今現に”理解され内的に或いは外的に“言われる”ということを通してのみ、actus essendi を表わしただすのである。それゆえ、actus essendi が表示されるのは、esse とか est という言葉ではない。esse, est は述語づけ断定する行為の“しるし”(nota praedicationis) にすぎないのである。actus essendi は結合する、或いは分離する今の現実の行為において意識化される。これを表現する為にトマスは compositio, divisio という行為を表わす名称によるよりも、好んで動詞の分詞形 componendo et dividendo を用いている。この意識化された actus essendi を表示するのは、あくまでも現に今述語・断定する行為である。つまり enuntiatio においてのみ、actus essendi が表示され、ことばが〈真に意味のあるもの〉にもたらされるのである。そして、文の要素として見るならば、actus essendi は、この enuntiatio の中で、modus essendi を表わすことばを真に意味あるものとする言葉、名称をつなぎ現実に生かす言葉、つまり copula の EST が直接に表わしている。それ故、トマスにとって EST は概念と概念を結ぶにすぎない単なる copula ではない。それは概念を表示しないという意味で無内容であるが、主語・述語の表示するものが〈現実に〉一つであることの意識(現実判断)を表示するものである。要するにトマスは、概念のレベルの言葉と判断のレベルの言葉とを明瞭に区別し、この区別が取りも直さず実在に根ざしていること (distinctio realis) を明らかにしたのだった。従って、トマスのエッセは存在とか有とか無とか(これらはすべて本質・概念である)と同じレベルで考えられることはできない。(概念化できないという意味で無というのであれば別であるが。) EST という言葉が他の動詞と同じレベル(名称・概念)で捉えられるならば、トマスのエッセは理解できない。EST という言葉にこだわる必要すらない。EST の現われない主語+述語の形式の言明文においても、主語に述語が繋がられている、ということに

よって、actus essendi が表示されているのである。従って、EST に当たる copula のない言語においても、述語づけ (praedicatio) という行為があるところには、必ず actus essendi が表示されているのである。例えば、「りんごは赤い」という時、「は」でりんごと赤いが結ばれることによって、それは十分に表示されている。或いは、卓子と大が判断によって結ばれ「卓子大」と断定 (praedicare) される時、それは十分に表示されている。

\* \* \*

我々は、ありのままなる現実 (actus essendi) を認識することはできない。我々が知性認識しているのは、感覚によって知覚され、表象作用を通して能動知性が抽象した“内容”(本質)である。それは、あくまでも〈現にあるもの〉(entia)の“類似”にすぎない。しかし、それが“現にある”ものの類似であることを我々は感覚によって知っている。感覚のはたらき(現実態)は、ことば以前の“actus”(はたらき: 触れられるもの)と“actus”(はたらき: 触れるもの)の触れ合い、出会いである。actus essendi は先ず第一に感覚的経験によって捉えられている。この経験への立ち帰りが、トマスの認識論においては重要な位置を占めている。

我々は actus essendi と modus essendi とが一つになっている世界、すなわち entia の世界に住んでいる。modus は現実には (in actu) actus essendi から切り離されえない。“in actu esse”においてのみ modus は“真に意味をもつ”。それは、あくまでも esse の modus (modus essendi) なのであるから。ところで、個体(実在)において“modus”essendi はつねに刻々と変化している。この変化する様々の modi essendi を一つにし、個体の同一性を真に保証するのは今、現にある、というこのことである。“MODUS”(essendi) (本質)と ACTUS essendi とは、“現にある”ことにおいて不可分でありながら、また別々の原理として分離の“可能性”を有している。

この“現実”の世界は豊かさ(様々なるはたらき方)に満ちたはたらき(actus)の世界である。ここでは全てのものが X スル或いは X シテイル (cf. p.29)。熱スルに倣って言えば、人スル、人シテルとも言えよう。しかし、

如何にXに当たる言葉を連ねようとも、豊かな実在を言い尽くすことはできない。ところで、actus essendi はあまりにも当然のことと思われ、我々の知性は“modus” (X) の方に心を奪われ、modus の分析に終始している。(科学はまさにこのことに従事する。ところで如何に modus を分析しようとも、それによって actus essendi を説明することはできない。actus essendi は modus の次元を超越する。それは神の領域に属する事柄である。ここにこそトマスは esse の participatio の意味、創造の意味を見出すのである)。アリストテレスもその例外ではないことを我々はみた。しかし、トマスはこの actus essendi を全面に据え、この actus essendiこそ人間知性が形相・本質を捉えてくる源であることを強調する。然しながら、この actus essendi は形相・本質の背後に隠れ、これを純粹に全面に出すことは至難の技であった。ボナヴェントゥラは、その著『魂の歷程』に於いて、この事実に注意を促がして雄弁をふるって言う。「知性が盲目となり、先ず最初に目に入ってくるものであり、しかもそれなしには何ものをも認識することができないところのものを考察しないというのは、奇異なことである。しかし、様々な異なる色を凝視している眼が、それによって他のものが見られるところの光を見ないと同様に、或いはたとえ見たとしても注意を払わないと同様に、我々の精神の眼は、特殊的なる存在者と普遍的なる存在者を凝視していても、〈全ての類を越える現実存在〉(esse extra omne genus) そのものについては、これが最初に精神にやってくるものであり、他のものはこれを通してやってくるのであるにも拘らず、注意を払わないのである」<sup>66)</sup>。ところで、ボナヴェントゥラは、この actus essendi の次元を表現するためにトマスとは別の哲学的方法を用いたために、その神学的思索において、トマスとは異なる仕方で問題にアプローチしたのだった<sup>67)</sup>。

## 註

## 1) 「實在」という言葉の使用について：

筆者が用いる「實在」という言葉はトマスの用語と一対一の対応をなしているわけではない。それは、時にはトマスの *res* と置き換えられ、時には、トマスの *ens* と置き換えられる。トマスが厳密に *res* という言葉を規定して用いる時、それは *esse* の含まれない〈何かのもの〉を意味表示する。しかし、広く *in re* などの形で用いる時、それは、實在という意味に近い。ここでは *res* (何かのもの) と *ens* (あるもの) の合わさったようなものを意味している。なぜなら、現実とは〈何か〉と〈ある〉が不可分一体になっているものであるから。(cf. “*ens sumitur ab actu essendi, sed nomen rei exprimit quidditatem sive essentiam entis.*” *De verit.* q. 1, a. 1, Resp.)

テキストについて：本稿のために使用したトマスのテキストは、マリエッティ版である。アリストテレスの羅訳は、*Aristoteles Latinus* を参照した。なお、アリストテレスの引用は、トマスが引用する場合にも筆者が引用する場合にも、ともに二重カギカッコを用いた。

2) トマスがこの *esse* という言葉（ひいては被造物における *esse* と *essentia* の實在の区別）に込める意味を明らかにするためには、被造物と創造主・神といった枠組から出発するのは多くの誤解を生ずる怖れがあると筆者は考える。なぜなら、こうした枠組から出発する場合、*essentialiste* 的な表現を避けることは容易なことではなく、かかる表現によってトマスの *esse* は *essentialiste* 的意味合いで読まれる危険があるからである。また、神と被造物といったアブリオリの枠組から出発するのは、トマスの本意にも反するであろう。なぜなら、トマスの方法はアリストテレスに倣って常に〈我々にとって明らかなるもの〉から〈それ自体においてより明らかなるもの〉へ進むことであるから。また更に、神による被造物の創造ということ信じない人にとっては、我々の日常出会う事物における *esse* と *essentia* の区別は、理解しえない事柄になるからである。

ところで、ジルソンはトマスの哲学の方途を他の哲学の方途から区別して、後者を *essentialisme* と呼んだ。しかし、ジルソンはトマスの *esse* の独自性を明らかにするために直ちに創造論を採用したために、哲学の方途が實在理解と混同され、多くの *essentialistes* たちの誤解と批難を招くことになった。実際、實在の理解に関して言えば、トマスは他のキリスト教神学者たちと見解を異にするわけではない。キリスト教のみならず一神教に基づく思想家たちで、我々を取り巻く事物や、この世界で生起している事柄が現実にあること、そして、それがとりもなおさず超越する神の創造行為によることを疑い否定する者はないからである。

3) *In Peri Hermeneias*, L. I, l. 5. n°56 は、マリエッティ版に付されたトマスの註解のパラグラフ番号である。以下パラグラフ番号のみ記す。

- 4) verbum importat compositionem, qua praedicatum componentur subiecto.
- 5) Sola oratio perfecta facit quiescere intellectum, non autem nomen, neque verbum si per se dicatur.
- 6) Et ideo statim Aristoteles subdit: Sed si est, aut non est, nondum significat.
- 7) illa verba, quae maxime videntur significare veritatem vel falsitatem, scilicet IPSUM VERBUM QUOD EST ESSE, et verbum infinitum quod est non esse.
- 8) quorum neutrum per se dictum est significativum veritates vel falsitates in re; .....Vel potest intelligi hoc generaliter dici de omnibus verbis.
- 9) Ubi notandum est quod in graeco habetur: "Neque si ENS ipsum nudum dixeris, ipsum quidem nihil est."
- 10) Et hoc est quod dicit, nihil est, ID EST NON SIGNIFICAT ALIQUID ESSE.
- 11) Si vero dicatur, nec ipsum esse, ut libri nostri habent, planior est sensus. Boethius 訳では nec si hoc ipsum est purum dixeris; Moerbecke 訳では neque si ens dixeris ipsum nudum.
- 12) ens imponitur ex actu essendi. *In Met*, L. IV, l. 2 n°553. *De Verit.* q. 1, a, 1 Resp.
- 13) si quidem haec dictio ENS significaret esse principaliter. (n°71)
- 14) significat IN ACTU ESSE, et IDEO significat PER MODUM VERBI.
- 15) esse, commune quoddam est. *I Sent*, d. 23, q. 1, a. 1, c.
- 16) esse commune. *S. T.* I, q. 3, q. 4, ad 1.
- 17) ens commune. *I Sent*, d. 8, q. 4, a. 1, ad 1; *II C. G.* c. 54, fin.; *S.T.* I q. 93, a. 9 c; *S. T.* I-II q. 66, a. 5, ad 4.
- 18) essentia dicitur cuius actus est esse. *I Sent.* d. 23, q. 1, a. 1, c.
- 19) Esse enim est actus alicuius ut quod est, sicut calefacere est actus calefacientis; et est alicuius ut quo est, scilicet quo denominatur esse, sicut calefacere est actus caloris. *ibid.*
- 20) ce dont provient un état, une action; la conformité, ce qui est fait à partir d'une chose prise pour guide; la manière. cf. A. ERNOUT et F. THOMAS, *Syntaxe Latine*, 1972, pp. 79-103.
- 21) cum IN RE duo sint, quidditas rei et esse eius. *I Sent.* d. 38, q. 1, a. 3 c.
- 22) IN QUOCUMQUE ENIM ALIUD EST ESSENTIA, ET ALIUD EST ESSE EIUS, oportet quod aliud sit quo SIT, et aliud quo ALIQUID sit, nam per esse suum de quolibet DICITUR quod EST, per essentiam vero suam de

quolibet DICITUR QUID sit. Unde et definitio significans essentiam, demonstrat QUID est res. *Compend. Theol.* c. 11.

- 23) esse est actualitas omnis formae vel naturae; non enim bonitas vel humanitas significatur in actu, nisi prout significamus eam esse. Oportet igitur quod ipsum esse compararetur ad essentiam quae est aliud ab ipso, sicut actus ad potentiam. *S. T. I<sup>a</sup>, q. 3, a. 4 c. cf. II CG. c. 54.*
- 24) Hoc quod habet ESSE, efficitur ACTU existens. Unde patet quod HOC quod dico ESSE, est ACTUALITAS omnium actuum, et propter hoc est PERFECTIO OMNIUM PERFECTIONUM. *De Pot., q. 7, a. 2, ad 9.*
- 25) Nec intelligendum est quod... *ibid.*
- 26) Nec intelligendum est quod EI, quod dico ESSE, aliquid addatur, quod sit EO formalis, IPSUM determinans sicut actus potentiam. ESSE enim quod huiusmodi est, est ALIUD, secundum essentiam, ab EO, qui additur determinandum. NIHIL autem potest addi ad ESSE, quod sit extraneum ab IPSO, cum ad EO nihil sit extraneum nisi non ens, quod non potest esse nec forma nec materia. Unde non sic determinatur ESSE per ALIUD sicut potentia per actum, sed MAGIS sicut actus per potentiam. *ibid.*
- 27) "hoc nomen Ens quod imponitur ab ipso esse, significat idem cum nomine quod imponitur ab ipsa essentia." *In Met. L. IV, 1. 2, nn°550-552, 558.*
- 28) actus est, quando res est, *In Met. L. IX, 1. 5, n°1825.*
- 29) Actus...definiri non potest. *ibid. n°1826.*
- 30) ita proportionaliter ex particularibus exemplis possumus venire ad cognoscendum quid sit actus et potentia. *ibid. n°1827.*
- 31) Hic Philosophus distinguit quot modis dicitur ens, *In Met. L. V, 1. 9, n°885.*
- 32) hoc totum, homo est albus, est ens per accidens. *ibid.*; secundum absolutam entis considerationem. *ibid.*
- 33) Quae quidem comparatio significatur hoc verbo, Est, cum dicitur, homo est albus. *ibid.*
- 34) aliquid praedicatur de aliquo...per accidens. *ibid.*
- 35) In omnibus enim his, ESSE, nihil aliud significat quam accidere. n°886.
- 36) nn°887-888.
- 37) illa dicitur esse secundum se, quaecumque significant figuras praedicationis. n°889. diversum modum praedicandi, qui consequitur diversum modum essendi. n°890.
- 38) ens contrahatur ad diversa genera secundum diversum modum praedi-

- candi... n°890.
- 39) oportet quod unicuique modo praedicandi, esse significet idem. n°890.
- 40) n°891.
- 41) Verbum enim quodlibet resolvitur in hoc verbum Est, et participium. n°893.
- 42) “quoties ens dicitur”, idest quot modis aliquid praedicatur, “toties esse significatur,” idest tot modis significatur aliquid esse.
- 43) quot modis praedicatio fit, tot modis ENS dicitur. n°893.
- 44) ens, quod est extra animam n°889.
- 45) Divisio vero entis in substantiam et accidens attenditur secundum hoc quod aliquid in natura sua est vel substantia vel accidens. n°885.
- 46) alium modum entis, secundum quod est tantum in mente...n°889.
- 47) esse significat veritatem rei...veritas propositionis potest dici veritas rei per causam. Nam ex eo quod res est vel non est, oratio vera vel falsa est. n°895.
- 48) Cum enim dicimus aliquid esse, significamus propositionem esse veram. Et cum dicimus non esse, significamus non esse veram; et hoc sive in affirmando, sive in negando. *ibid.*
- 49) ...propositione, quam intellectus significat per hoc verbum Est prout est VERBALIS COPULA. n°896
- 50) Unde veritas propositionis potest dici veritas rei per causam. Nam ex eo quod res est vel non est, oratio vera vel falsa est. n°895. Ex hoc enim quod aliquid in rerum natura est, sequitur veritas et falsitas in propositione. n°896.
- 51) voces significativae formantur ad experimendas conceptiones intellectus, ideo ad hoc quod signum conformetur signato, ... *In Peri Herm.* L. I, 1. 3, n°24.
- 52) *I Sent.* d. 38, q. 1, a. 3, c; *In Peri Herm.* L. I, 1. 3, n°1, nn°24-25; 1. 5, n°68; *De verit.* q. 1, a. 3, c.
- 53) quia etiam ESSE REI ex materia et forma compositae, a qua cognitionem accipit, consistit in quadam compositione formae ad materiam, vel accidentis ad subiectum. *I Sent.* d. 38, q. 1, a. 3, c.
- 53a) *Ibid.* ad 2.
- 54) *In Met.* L. V, 1. 9, n°895.
- 55) Hoc enim verbum ‘est’ aliquando per se praedicatur, aliquando est tertium adiacens. Quando per se dicitur, tunc dicit actum absolutum, quia dicit ACTUM ENTIS RATIONE ESSENTIAE; ET TUNC OPORTET QUOD DICATUR

- ABSOLUTE ET QUOD DICAT QUID. *In Sent.*, d. 7, q. 1, Resp. [I 136a]; Si vero quaeratur de hac: 'malitia est', utrum sit concedenda, vel non, ...Est enim sensus; 'malitia est' id est, 'malitia est ENS', id est ESSENTIA ALIQUA; HOC ENIM VERBUM 'EST' SIGNIFICAT ESSENTIAM VEL SUBSTANTIAM UNIUSCUIUSQUE. *II Sent.* d. 34, a. 2, q. 3, ad 2 [II 816 a].
- 56) *In Peri Herm.*, L. I, 1. 2, n°212.
- 57) L. 1. 1, 9. n°112. Quod est et quod non est, sit referendum ad solam existentiam vel non existentiam subiecti, sed ad hoc quod res significata per praedicatum insit vel non insit rei significatae per subiectum.
- 58) quasi apprehendens coniunctionem aut identitatem rerum, quarum sunt conceptiones. *ibid.*, 1. 3, n°26.
- 59) per hunc etiam modum in vocibus affirmatio dicitur compositio, in quantum coniunctiones EX PARTE REI significat; negatio vero dicitur divisio, in quantum significat rerum separationem. *ibid.* L. I, 1. 3, n°26.
- 60) praedicatum et subiectum sunt idem supposito, sed diversa ratione. S. T. I, q. 13, a. 12 c.
- 61) Huic vero diversitati quae est secundum rationem, respondet PLURALITAS praedicati et subiecti. *ibid.*
- 62) in intellectu nostro..., qui de uno in aliud discurrit, propter hoc quod species intelligibilis sic repraesentat unum quod non repraesentat aliud. Unde... intelligimus... secundum quamdam successionem. *ibid.*, q. 14, a. 14 c.
- 63) Ea quae SEORSUM DIVISUM intelligimus, oportet nos IN UNUM REDIGERE PER MODUM COMPOSITIONIS VEL DIVISIONIS, enuntiationem formando. *ibid.*
- 64) Alio modo dicuntur diversa genere, quae dicuntur "secundum diversam figuram categoriae", id est praedicationis entis. Alia namque entia significant quid est, alia quale, alia aliis modis, sicut divisum est prius, ubi tractavit de ente. Ista enim categoriae NEC RESOLVUNTUR INVICEM, QUIA UNA NON CONTINETUR SUB ALIA: Nec resolvuntur in unum aliquid, quia non est unum aliquod genus commune ad omnia praedicamenta. *In Met.* L. V, 1. 22, n°1126.
- 65) sicut hoc nomen homo, quod est pars orationis, significat ALIQUID, sed non significat ut affirmatio aut negatio, quia non significat ESSE vel NON ESSE. Et hoc dico non IN ACTU, sed solum IN POTENTIA. Potest enim aliquid addi, per cuius additionem fit affirmatio vel negatio, scilicet si addatur ei VERBUM. *In Peri Herm.* L. I, 1. 6, n°78.

- 66) *Itinerarium mentis in Deum*, c. 5, n. 4.
- 67) ボナヴェントゥラについては、拙著 *Un Dieu transcendant, Créateur et Exemple, selon saint Bonaventure: Un essentialisme cohérent* で詳細にテキスト分析を行った。

## 付 記

筆者がボナヴェントゥラに関する最初の論文 *L'homme à l'image et à la ressemblance de Dieu selon saint Bonaventure* を提出した時、トマスの同じ問題へのアプローチとの相違が絶えず念頭にあった。この点に関して、審査員であった A. Chavasse ストラスブール大学教授（現名誉教授）は、両者の存在論の相違を明らかにするようにとの課題を筆者に課せられた。この問題を追ってトマスとボナヴェントゥラを読み比べていく過程で、絶えず批判と貴重な示唆を Chavasse 先生から賜わった。記して感謝の意を表したい。

尚、本論文に密接に関連する文献をあげれば次のようなものがある。(1)と(2)は Chavasse 先生の御指摘により筆者の参照したものである。

- (1) MARC, Andre, *L'idée de l'être chez saint Thomas et dans la scolastique postérieure*, Paris, 1933.
- (2) RABEAU, Gaston, *Le jugement d'existence*, Paris, 1938.
- (3) BURRELL, David, *Aquinas, God and Action*, London, 1979.
- (4) BATHEN, Norbert, *Thomistische Ontologie und Sprachanalyse*, Freiburg/München, 1988.
- (5) ZIMMERMANN, Albert, "Ipsium enim EST nihil est' (Aristoteles, *Peri Herm.* I, 3): Thomas von Aquin über die Bedeutung der Kopula", *Miscellanea Medievalia*, 8, 1971, p. 282-295.
- (6) BROWN, Montague, "Thomas Aquinas and the Real Distinction: a re-evaluation" *New Blackfriars*, June 1988, p. 270-277.
- (7) PATT, Walter, "Aquinas's Real Distinction and Some Interpretations", *The New Scholasticism*, 62, 1988, p. 1-29.